

## ラン科に見られるペロリズムについて —キンラン属植物を例として—

埼玉県所沢市 谷亀 高広  
美唄市 新田 紀敏

ラン科植物には同一種内における個体変異が多数確認されており、それが同科植物の愛好家を増やす要素のひとつとなっている。北海道では馴染が薄い種かもしれないが、たとえばウチョウラン *Ponerorchis graminifolia* Rchb.f. は、同一種内の変異とは思われないほど、様々な変異が発見・選抜されており、それが園芸化の原動力の一つともなってきた。谷亀自身、色彩変異を1品種共著で報告してはいるが、ラン科植物の変異個体を山ほど見ている者として、個体差の範疇を出ない変異にいちいち品種名を付け、学術誌に投稿することが意義深いこととは思っていない。上記のウチョウランをはじめとする、園芸化された野生ランをどう扱うのか、という問題もあるだろう。とはいえ人は目の前にあるその花に他と違った特徴があれば気になるものだし、その記録をとどめておきたいと思うことも、ある意味自然なことなのかも知れない。本稿では、ラン科植物のペロリズムについて簡単に触れ、道内で確認されたラン科キンラン属植物のペロリズム個体について報告する。

### ペロリズムとは

ラン科植物の花被片は、3枚の外花被、3枚の内花被から成る。そのうち背軸側の1枚がほかの2枚とは形態的特徴が異なるため「唇弁」と呼ばれており、この花弁の構造が属や種の特徴となることが知られている(遊川 2015)。しかし、突然変異によりこの1枚の唇弁となるべき位置にあ

る花被片が、他の花被片と相同の形態的特徴を持つ個体が生じることがあり、こういった変異はペロリア (peloria) と呼ばれ、こういった現象をペロリズムと言う(前川 1971)。ペロリズムの例は品種として記載されている例を見ると、キリガミネアサヒラン *Eleorchis japonica* (A. Gray) F. Maek. var. *conformis* (F. Maek.) F. Maek. ex H. Hara et M. Mizush. (前川 1971)、イソマカキラン *Epipactis thunbergii* A. Gray f. *subconformis* Sakata (前川 1971)、ヒトツボクロモドキ *Tipularia japonica* Matsum. var. *harae* F. Maek. (前川 1971)、ホシガタナギラン *Cymbidium nagifolium* Masam. f. *comforme* Suetsugu (Suetsugu 2013) などがあり、それぞれサワラン *Eleorchis japonica* (A. Gray) F. Maek.、カキラン *Epipactis thunbergii* A. Gray、ヒトツボクロ *Tipularia japonica* Matsum.、ナギラン *Cymbidium nagifolium* Masam のペロリズムだ。他にもセッコク *Dendrobium moniliforme* (L.) Sw.、フウラン *Vanda falcata* Beer、シュンラン *Cymbidium goeringii* (Rchb.f.) Rchb.f. などが園芸的に選抜されており、「六弁花」などと称される。

このような変異は道内でごく普通に観察できるキンラン属植物でも発見されている。谷亀が道内でペロリズムの変異を初めて見たのは、ヤビツギンラン *Cephalanthera erecta* (Thunb.) Blume f. *pelorica* Hiro. Hayak. & Suetsugu (Hayakawa et al. 2020) だ。発見日は2013年6月12日で、勇払郡安平町の鹿公園で植物散策をしていた時だった。以前から植物愛好家の間で「距がないギン